

岩波
講座

日本文学史 第十五卷 近代

鷗外

加藤 周一

岩波書店

鷗

外

加

藤

周

一

目 次

鷗外とその時代	三
一 ヨーロッパと青年時代	二
二 啓蒙の時代	二六
三 小倉時代	二九
四 豊熟の時代	三〇
五 社会主義と晩年	三四
参考文献	三五

鷗外とその時代

鷗外森林太郎は、長州藩の仏艦砲撃・薩摩藩の英艦砲撃に先立つこと一年、一八六二年（文久二年）に生れて、関東大震災の前年、一九二二年（大正十一年）に死んだ。日本流の年代記にしたがえば、その生活はおよそ明治・大正の二代にわたり、昭和には及ばなかったことになる。しかし明治維新（一八六八）にはじまる「近代国家としての日本の成立」(E. H. Norman)は、第一次世界戦争の頃に一応完了した。鷗外はその時代に生き、その過程に参加し、まさに、「近代国家としての日本の成立」そのものを知的領域で代表したのである。

鎖国の日本は、十九世紀の末に突然西洋の技術を取り入れて、国を「近代化」する決心をかためた。あるいはむしろかためざるをえなかった。西洋の植民地帝国は、そのとき、世界中を植民地化する最後の過程に入っていたからである。インドで競争した英仏の植民地主義は、極東にその競争を延長しようとしていた。アメリカとロシアも、極東の舞台で各自のわけまえを狙っていた。もし植民地化されることを欲しないとすれば、このような先進国の例にならって、なるべく早い時期に国を工業化し、教育程度をあげ、徴兵制度を布いて、いわゆる富国強兵策を敏捷に実行するほかなかったであろう。事実それが明治政府のやったことである。またそれだけが明治政府のやったことである。しかしそれだけでも世界中をおどろかせるに足りることであった。ヨーロッパおよびその延長である北米合衆国以外の地球上に、急速な工業化を伴う近代国家の成立が可能であるということを、そのときはじめて日本が証明した。日本の軍隊と艦隊は、西洋の植民地帝国の大がかりな遠征軍を、一九〇四―五年（明治三十七―十八年）に、満州で破り、日本海で粉碎した。先の見透しのきくあるフランスの詩人は、そのことのうちに、ヨーロッパの技術文明がヨーロッパにだけ専有されている時代のやがて終るだろうことを見抜いたほどである。日本がはじめてその可能性を証明した工

業化の道を、他日中国やインドも歩むだろう。どういう方式によってそうするだろうか、むろんそのときフランスの詩人は知らなかったし、その他の誰も知らなかった。そして日本の方式と、その意味についても、おそらく日本人自身が充分に理解してはいなかった。一九四五年（昭和二十年）がその必然的結果であったと主張するのはむろん無理である。しかし一九四五年と無条件降伏が、「近代国家」の成立の過程と密接につながっていたということは否定できない。そしてそのつながりは、当然のことながら、明治の知識人の大部分には予想を絶することであった。しかしそれにしても奇蹟は、どうしておこったのか。

第一に地理的環境と時期の問題がある。極東は植民地帝国のどの中心からも遠かったし、日本は島国であった。そこで列強の相互の競争がつり合っていた。ツァーリの艦隊が十年早く日本海にあらわれていたら、事情がどう変わったか誰にもわからない。明治政府は時をかせぐことができた。また精神的には、一八六八年以前の封建制が育てた忠誠の観念を、天皇象徴へ集中させることで、国民的統一をつくりあげた。経済的には、多くの史家が指摘しているように、農村の封建性を温存し、途方もない物納小作料を明治維新は少しも変えなかった。そのことは巨大な貧農の層の存在を意味し、巨大な貧農の層は工業にとって有名な低賃銀労働者の供給源を意味したであろう。未曾有の工業投資は、ほとんど外資の導入によらず、戦争殊に日清戦争の賠償金によって大いに補われ、持続的に高い貯蓄率によって維持された（都留重人「成長率の概念と日本への適用」「経済の論理と現実」昭和三十四年）。要するに日本の急速な工業化は、天皇制・家族制度・地主制度・軍国主義を支えとして行われたことになる。つまり国の「近代化」は国の内部の「非近代」を積極的な支えとして行われた。これは一八六八年にはじまり一九四五年に崩壊した日本の社会の基本的構造であるといつてよいだろう。

鷗外が時代の代表的な知識人であるという意味は、何よりもこの社会の二重構造が、知的領域で、鷗外のうちにもっとも鋭く反映しているという意味である。西洋の自然科学の精神を伝えたのは鷗外であり、同時に徳川時代の武士

道の精神に文学的表現をあたえたのも鷗外であった。一方で文学芸術が政治権力から独立し、それ自身を目的とすべきことを強調し、他方では帝室主義に忠実であり、「家」の道徳に従っていた。つまり西洋を媒介とする「近代化」の必要をみとめながら、その近代化の支えを非近代的な伝統的倫理にもとめていたことになる。明治維新は「上からの革命」であった。鷗外はその権力の官吏であり、帝国陸軍の軍医であった。「上からの革命」の目標は、西洋列強に伍するということであったが、鷗外は西洋から摂取できるものを摂取しようとして、事実、もっとも多くを摂取することのできた日本人の一人である。（鷗外が権力の側にあったということ、単なる傍観者ではなく権力のために、もっとも聡明に、したがってもっとも強力に戦ったのだということは、その思想との関連において、中野重治氏によって強調されている。）

しかし鷗外が時代の代表的知識人でありえた理由は、それだけではない。木下李太郎（明治一八年―昭和〇年）によれば鷗外は「テエベス百門の大都」である。どこからでも入れるというのだが、少くとも倫理（人生）、政治（社会思想）、科学（医学）、芸術および文学のすべてに対して独特の立場をもち、その相互の関連について、鷗外ほど明瞭に語った人物は、同時代にいないだろう。ということは、むろん医者にして文士を兼ねたという程度のことではない。それだけならば生活上の便宜の問題にすぎない。また生活と文学や学問をわけて考え、その二極の緊張のなかに鷗外が存在があったというだけで、尽くされるようなことでもない。知識の広さそれ自身に意味があるのではなく、知識の広さが知識の深さにもとづく必然の結果であるということに意味があるだろう。深さというのが正確ならば、知識の特定の質といってもよい。知識の特定の質は、その普遍性であり、一個の精神においてすべての知的領域をつなぐものであり、そこに触れてたとえば科学と芸術とは一方に関心をもち他方に関心をもちたぬことが不可能となるようなものである。その意味で知識人を知的技術者から区別するとすれば、言葉の厳密な意味において、鷗外は明治以後の日本に例外的な少数の知識人の一人であった。しかし念のために附加えれば、科学と芸術とが同じ精神の場において問題

になるということは、両者がむろん融合するということではない。むしろ逆に両者の区別がはっきりするということである。「医学の説より出でたる小説論」(明治三年)でフランスの自然主義文学理論の不備を指摘し、文学の科学と異なる点を強調したのは、みづから科学者であった鷗外であって、試験管を一度も握ったことのない日本自然主義の文学者ではなかった。科学的芸術論や科学小説をおもしろがる人々は、芸術的体験がよほど浅薄であるか、科学なるものを根本的には全く理解していないか、どちらかだと考えてまずまちがいないだろう。その逆が鷗外であり、李太郎である。しかし異なる知的領域に共通の一個の精神の場があるということとは、そこに理論的にも、また人間的にも、綜合と統一があるということではない。それはあり得るかもしれないが、少くとも鷗外の場合にはなかった。生活または倫理と、文学や芸術との対立を指摘するのは正しい。しかしその対立の上に鷗外論を組み立てるのは、一面的だろうと思う。対立は科学と芸術との間にもあった。また生活と科学との間にもあった。たとえば「妄想」(明治四四年)の主人公も回顧するように、鷗外は実験室でなし得たかもしれない科学的研究を、中途にして放棄したのである。しかしそういう対立のすべてを蔽って、根本的には、西洋的なものと日本的なもの、それとそのままは重ならぬが、近代的なものと非近代的なものととの対立があった。そしてそのことは「傍観」とはちがう《Resignations》という言葉の意味をあきらかにするために重要である。

そしてむろん鷗外は自己を表現した。それが文学者ということの意味である。そのことの内容には後に触れるが、近代日本の代表的文学者であったということが、すでに時代を代表する知識人であったということのもっとも重要な資格の一つであることはいうまでもない。

最後に影響ということがある。さしあたって文学以外の領域には触れないとしても、少くとも初期の鷗外は、その存在の全体をもって、同時代の文学者のほとんどすべてに影響したといえる。木下左太郎が指摘しているように、「舞姫」という小説、「即興詩人」から「諸国物語」に到るほんやく、「柵草紙」その他の評論活動によって鷗外は、

近代文学の概念そのものを日本に導き入れた。「徳川時代には所謂戯作であつた所の文芸を士大夫の芸にまで高めた」のであり、「是れは我国の文明史の上で未曾有の事であるとは謂へないにしろ、頗る重要な事であ」るにちがひなく、話がここまで来ると影響というあいまいな言葉をめぐって今さら右往左往する必要もないほどである。明治・大正の文学者の多くは、その若い時代に、「即興詩人」の數行を暗んじていた。正宗白鳥は書いて、「若い男女の恋を描いて、情景兼ね備つた小説は、明治以来即興詩人に及ぶものはなかつた。私は三たびこの物語を読んだ」(『森鷗外』昭和三年、「作家論」昭和二十九年角川書店と。これは白鳥だけの経験ではなかつた。そしてこれだけのことから影響のほどは察せられる。すなわちその意味でも鷗外は明治・大正の代表的な文学者であり、知識人であつた。

しかし、もっとせまい意味で「直接の影響」を辿ることもできない。たとえば佐藤春夫(近代日本文学の展望)昭和二十五年 講談社)は、永井荷風(明治二十年—昭和三年、一八七九—一九五九)、斎藤茂吉(明治五年—昭和二年、一八八二—一九五三)、木下杢太郎、芥川竜之介(明治五年—昭和二年、一八八二—一九五三)をあげている。おそらく妥当であろう。しかしその「直接の影響」の内容は必ずしも「義的に明かではない。

今文体という観点からいえば——文体はこれを比較検討して客観的に影響のあとを確かめることができる——、荷風と杢太郎に鷗外の文体の影響はもっとも著しいと私は考える。杢太郎の場合にはその時期によるちがいがめだたず、一貫して文体の鷗外風がみられるが、荷風の場合には、鷗外と直接に接していた時代から遠ざかるにつれて、その文体がいよいよ鷗外の文体にちかづくという一見不思議な現象を呈している。このことは鷗外の文体の質、また一般に漢文脈を主とした現代日本文の可能性について、実に多くのことをわれわれに示唆するだろう。つまりこの先にはもはやこの方向での可能性がほとんどなからうということである。漢文脈を生かし、漢語を活用して、独特の文体をつくり出すという事業は、鷗外の史伝において極致に達した。荷風の個性と生き方のあれほど鷗外から隔っていても、文章を文章として追求すれば、行きつくところ鷗外の結果にちかづかざるをえなかつたからである。余談ながら芥川竜之介の用いた漢語は、荷風の場合ほどにはこなれず、それよりも若い作家の場合には、まずほとんど読むにたえな

い程度でしかない。日本文学の以後の世代が、文章に成功したのは、これとは別の道を辿った場合にかぎられているといつてもよい。石川淳は江戸の和文脈を利用して独特の文をつくり、中野重治は口語を活用して別天地をひらいた。この二人の作家が鷗外について独創的な考えをうち出したし、またうち出し得るほどに深く鷗外を読んだということも、偶然ではないかもしれない。しかし荷風が晩年に及んで——詳しくいえば「下谷叢話」以後に——、いよいよ文体の上で鷗外にちかづいたということには、単なる文体を越える理由も含まれていたと想像される。荷風だけではない、白鳥もまた、「私などは、後半世の創作において、鷗外に重きを置くやうになつてゐる」と書いた(前掲論文)。後半生において——、おそらく作家は後半生において自己の限界を知りはじめるにちがいないが、作家の自己の限界は時代ときりはなすことのできないものだ。自己の限界を意識するのは、したがって自己の生きてきた時代の限界を意識することでもあるだろう。荷風や白鳥を決定した時代の本質は、深く、鷗外の精神のうちに体现されていた。そのことを白鳥自身は、こういう言葉で要約している、

理論は兎に角、明治以来の代表的作家の重要な作品を殆んど読み尽してゐる私は、どういふ作家のものに心酔し、これこそ文学だといふ感じに打たれて来たのであらうかと回顧すると、可成り多くを数へ上げることが出来るのであるが、しかし、さういふものも、今日手に取つて見ると、大抵色の褪せたものとして、私の目に映るやうになつてゐる。……そこへ行くと、森鷗外の作品は見ぎめがしない、天才らしい強烈な芸術の匂ひがない代りに、鈍味な痕を留めてゐないのがいゝ。明治以来の日本には、大なる天才は現はれなかつた。われわれを渦の中に巻込むやうな作家はなかつた。せめて、聡明なる人鷗外の語るところを、私は耳を澄して聴くことを喜んでゐる。

(前掲論文)

これは白鳥流である。しかし鷗外は「聡明なる人」一般であつたのではなく、言葉の全き意味において、まさに明治・大正的に「聡明なる人」であつたのだ。もちろん同じ時代は、また「鈍味」のためにも、ありあまるほどの口実

と機会を提供していたことは、いうまでもない。

鷗外「テエバス百門の大都」を語るためには、入るべき門の順序を定めなければなるまい。今はかりに年代記的順序によって章をわけると、その生涯の年代の区分は、従来にたびたび行われて、それぞれ理由があり、たとえば森潤三郎「鷗外森林太郎」は、十六章をわけて生涯を記述している。

出生より上京まで（一八六二〔文久二年〕—一八七二〔明治五年〕）

大学より陸軍出身まで（一八七三—一八八三）

留学時代（一八八四—一八八八）

文壇に乗り出した時代（一八八九）

文壇活躍時代 上・中・下（一八八九—一八九五）

目不醉草時代（一八九五—一八九九）

沈黙時代（一八九九—一九〇二）

芸文及び万年艸時代（一九〇二—一九〇三）

日露戦役出征（一九〇四—一九〇五）

活躍準備時代（一九〇五—一九一〇）

文壇再活躍時代（一九一一—一九一二〔大正元年〕）

歴史小説の製作（一九一二—一九一四）

考証学伝記の研究（一九一五—一九一七）

帝室博物館総長兼図書頭（一九一八—一九二二）

生涯のおよそはこれによって知ることができる。一目してあきらかなのは、その文学的活動に前後二つの時期のあ

ること、その間にここで「沈黙時代」とよばれている小倉時代がはさまっていること、文学的活動前期のまえには留学において完成する準備的な時期があり、文学的活動後期の後には歴史小説と伝記の仕事に「なかじきり」をあたえて引退した晩年のあることであろう。もしできるだけ簡単な区分をするとすれば、五期にわけるのが適当だと思われる。

第一、ヨーロッパと青年時代（一八六二—一八八八） 二十七歳まで

第二、啓蒙の時代（一八八八—一八九九） 三十八歳まで

第三、小倉時代（一八九九—一九〇六） 四十五歳まで

第四、豊熟の時代（一九〇六—一九一七） 五十六歳まで

第五、社会主義と晩年（一九一七—一九二二） 六十一歳まで

第一に「ヨーロッパと青年時代」というのは、青年時代の最大の問題が、鷗外にとっても、日本にとっても、ヨーロッパとの接触であったからであり、第五に「社会主義と晩年」というのは、晩年の鷗外にとっても、当時の日本にとっても、最大の問題は、社会主義の将来とそれに対する態度如何ということであつたからである。

小倉時代によってわけられる文学的活動の前期と後期は、それぞれおよそ十年間であつて、前期はすでに触れたように近代文学の概念の導入を主としているが、また近代科学の概念の紹介・主張ということも同時に行われている。

したがって文学的活動の前期というよりも、文学・医学両面の活動を併せて、「啓蒙の時代」といった方がよいと思う。この啓蒙活動は、またいわゆる「道鷗論争」や「傍觀機関」の論争をも含む戦闘的なものでもあった。後期に「豊熟の時代」の名をあてたのは、木下幸太郎である。私はその名称をかりる。歴史小説から史伝に到る鷗外の文学がその傑作のほとんどすべてを生みだした時代である。

前記石川淳・中野重治両氏の仕事は、鷗外研究において傑出しているが、私は殊に小倉時代以前については中野氏

から、以後については石川氏から、教えられるところが多かった。中野氏が主として問題としたのは国家権力との関係であり、石川氏が主として問題としたのは文学作品の評価を、史伝、殊に「瀝江抽象」におくことである。この二点は動かせない。私のすることは、いくらかそれを補うという程度以上には出ないであろう。

一 ヨーロッパと青年時代

鷗外自身の要約「徳富蘇峰氏に答ふる書」(明治三三年)(一八九〇年)に従えば、鷗外は一八六二年(文久二年)「累世津和野侯に仕えし医」家に生れ、故郷で漢学とオランダ語を学び、東京へ出てドイツ語と医学を修めた。東京大学医学部を卒業したのが、二十歳、一八八一年(明治十四年)で、卒業と同時に、陸軍軍医副に任じ、一八八四年から一八八八年まで、陸軍留学生として四年間をヴィルヘルム一世治下のドイツで過した。

卒業したる後、衛生学を専修せんとおもひ起ししが、師とすべき人なかりき。明治十四年陸軍に奉仕し明治十七年独逸国に留学を命ぜらる。独逸にてはライプチヒにてホフマンを師とし、ドレスデンにてロオトを師とし、ミューンヘンにてベツテンコオフエルを師とす。皆衛生学者なり。明治二十一年帰朝す。今猶軍医にて同僚のために衛生学を講ず。

「今猶」とは帰朝後二年、「舞姫」や「うたかたの記」の一八九〇年(明治二十三年)である。

この間の事情の留学以前については、小説「雁」や「キタ・セクスアリス」の叙述、留学中については「舞姫」の一部や「妄想」の主人公の回想から、補って想像することができる。また留学中に有名な「独逸日記」のあることはいうまでもない。肉親家族の回想記、殊に森潤三郎氏の伝記や小金井喜美子氏の帰朝当時の記事もある。

鷗外は学生時代に医学を修めるかたわら、大いに貸本屋の小説・随筆類をよんだ。そのなかには「金瓶梅」や「虞

初新誌」も含まれる。「キタ」には古道具屋の娘が出てきて、主人公の「僕」はその名も知らないが、

……僕は其頃から、ずっと後に大学を卒業するまで、此娘を僕の美しい夢の主人公にしてゐたに相違ない。……

文学的な読書に養われた感情生活は、この娘に対する態度に要約されているといつてよいだろう。「キタ」の主人公は待合で知った女に対しては、「恋愛の成就是あんな事に到達するに過ぎないのであるか。馬鹿馬鹿しいと思ふ」と呟くにすぎなかった。徳川時代の典医の家柄は、儒教的道徳に浸透されていたはずであり、上京して東京医科大学へ入った秀才は一家の希望を一身に担っていたはずである。理想的な息子であろうとする努力のなかで、感覚的なよろこびがそれ自体として追求される条件はなかった。留学以前の鷗外は、要するに感覚的世界をまだ発見してはいなかった。貸本屋の「文学」が、小説・随筆であり、小説・随筆とは戯作であつて、典医の「家」の束縛から感覚を解放し、もうひとつの生き方の可能性を積極的に支える根拠にはなりえなかったのである。

一方当時の大学の医学部教授はみなドイツ人であり、ドイツ語で講義していた。(そのなかには有名な Wernicke もいた。) 学生には、ドイツ語の知識、その後の医学部の学生はもとより、ドイツ文学専攻の学生よりもはるかに高い程度の知識が必要であつたにちがいない。実用的な意味で一応の用を便じる程度のドイツ語は、鷗外が、二十歳当時、その地を踏むまえに充分に心得ていたものである。それならば留学の志そのものも、「衛生学を専修せんとおもひ起ししが、師とすべき人なかりき」だけによつては、説明されなないと思われる。二十歳の青年がその程度に外国語を習つてその外国の文化からしたたか影響をうけないということはまず考えられない。衛生学が目的で、ドイツ留学がその手段、その留学の手段としてドイツ語学習があつたというような体裁は、あとから考えた順序にすぎず、実地には手段獲得の過程がかえつて目的を決定するという面もあつたにちがいない。鷗外はどうしてもドイツへ行こうと考えていた。大学卒業の時にはまず文部省からの留学を考え、その実現の困難を感じて後、留学の条件を公告していた陸軍軍医部へ入つたという事情は、書簡(賀古鶴所宛・一八八一年〔明治十四年〕十一月二十日附『文芸臨時増刊 森鷗外読本』)から

も察せられるのである。また陸軍へ入ってから後にも、留学を早めるために運動をした(「自記材料」一八八三年(明治十六年)三月の項、奥野信太郎「鷗外先生と祖父」新版「鷗外全集」月報二六、生松敏三「森鷗外」に詳しい)。しかしこういう経過が、鷗外の留学は医学研究を目的としていなかったということの意味しないのはいうまでもない。医学部の教授はドイツ人ばかりであった。その頃の学生は後年最初の日本人教授になるはずの人たちである。鷗外の同窓生のなかには、その後生涯の親友となった賀古鶴所のほかに、たとえば青山胤通や佐藤三吉や北里柴三郎などがいた。青山と佐藤は、それぞれ内科と外科の教授となり、北里柴三郎は伝染病研究所をひらき、鷗外は日本の衛生学の基礎をおいたのであって、彼ら自身のまえに「師とすべき人」の東京になかったのは当然である。日本の医学という観点からみれば、鷗外のドイツ留学は青山・北里等の留学と全く同じように必然的であつたろう。別の言葉でいえば、陸軍が鷗外をドイツへ送ったといえるのと同じように、日本医学が彼を送ったという議論もなりたつのである。行つた先で彼を待っていたのは、Pettenkofer や Robert Koch であらう。

しかしもちろん官費留学は、日本陸軍の予算によって行われた。中野重治氏の「陸軍軍医部へ養子縁組」という表現は、そのまま妥当するとしなければならない。中野氏は留学以前の生活程度と身分にも触れている。大学を卒業して陸軍軍医副となった鷗外は、月給四十二円―四十五円を得ていたはずである。同じ頃二葉亭は二十六歳で内閣官報局僱員となり月給三十円であった。陸軍省へ出勤するのに鷗外が自家の人力車を用いているとき、伊藤左千夫は金一円をもって家出していた。当時の文学者一般とくらべて鷗外的生活程度の高かったことはあきらかである。しかしそれ以上にやがて高くなるべき身分があった。その頂点、つまり鷗外の五十歳前後では、「医学博士でかねて文学博士である。軍医学校長扱いで軍医総監である。政府のやる美術展覧会の審査員であり、宮内省御用掛であり、政府のカナヅカイ委員会の委員であり、幸徳事件とデリケートな関係にある済生会の評議員であり、西園寺公爵と近づきであり、山県有朋公爵とは特別な近づきである」(「小説十二篇について」「鷗外・その側面」というところまで、ゆくはずの「身分」

というものがあつた。これが出発点においてすでに、たとえば「父親がタイコモチであつたことをひたかくしにかくしていた」紅葉の場合と、かけはなれていたことはあきらかだろう。天皇制の社会での身分は、天皇からの距離によつてきまる。鷗外ははじめからその距離を、陸軍という組織のなかへ入ることによつて、次第にちぢめて行く道にのり出した。陸軍はパイプのようなものである。一方の端は国内で山県を通し天皇につながり、他方の端は国外でビスマルクのドイツ陸軍とその周囲の上流社会へつながつていた。すでに語学的困難はなかつた。日本陸軍から派遣された留学生鷗外は、ドイツ陸軍とビスマルク官僚制のまただ中へ入る。

しかしそれは日本の知識人にとって最初のヨーロッパであつた。技術を摂取すべきところ、しかしその地に乗りこんでみれば、当年の日本社会とは全く異なる原理によつて動き、全く異なる風俗を展開し、全く異なる歴史を背後に担う社会があつた。鷗外がドイツへ行つたということ、しかも陸軍を通じて行つたということは重要だが、総じてヨーロッパとの接触一般ということもまた同じように重要である。なぜなら鷗外のドイツの体験は、必ずしもドイツ的なものではなく、一般にヨーロッパ的なものでもあつたにちがいないからである。とにかくこの青年時代の体験が、生涯を決定した。まさに明治以来の西洋文明摂取の態度が、以後の日本の文化の性格を实にはっきりと特徴づけたやうにある。

鷗外がヨーロッパでえたものの第一は、いうまでもなく新興の工業国ドイツがいかにして国をつくりあげたかという権謀術数の機微とまでいわぬにしても、少くともビスマルク官僚機構の实情の見聞であつたろう。たとえば「独逸日記」明治十九年（一八八六）二月十三日の条には、ヨーロッパの国際状態に触れて、「要するに法皇はビスマルク手中の一木偶に過ぎず」とまで書いている。そういう感想が一方にあり、他方にそういう感想と相對するビスマルクの国会解散（平時兵員を増すための議案否決に附しての解散）への疑問は「日記」のなかに全くみられない。日本の官僚機構の内側で、後年の鷗外は不満ももつた。「独逸日記」の時代においてさえ、その滞在の末に、隊附勤務を陸軍省の代

弁者から言渡されると、「林太郎は唯だ命令を聞くのみ。意見を陳ずべきに非ず。謹みて諾す。」という（一八八七年〔明治二十年〕十一月十四日）。このときたとえば官僚の身分と学問との矛盾は、充分に感じられていたはずであろう。しかし総じて「独逸日記」を読むと、少くとも外国にあって、鷗外が彼自身を日本の官僚的支配機構と一体化することに、強い抵抗を感じている形跡は、ほとんどみとめることができない。そしてそのことは、鷗外のヨーロッパのみ方をもそれなりに限定しないはずはなかつたろうと思われる。ヨーロッパは権力機構の上からみるものであり、そうみるほかないものであった。しかし、同時にそのことが自分の国に対する強い責任感の根源になつたろうということも、われわれはみとめなければならない。外国の場合とひきくらべて、日本をどうするか。この「どうするか」が具体的な考えになりえたのは、そもそも明治の日本では、官僚機構の内側、権力の側においてであつて、のぞみ少い反抗を執拗にくりかえしてきた自由民権の側、人民大衆の側においてはなかつたということに、悲劇的な状況があつたといえるだろう。この状況は鷗外個人を超える。彼は官僚だつたから外国にあって日本と自分自身とを一体化することに抵抗を感じず、その抵抗がなかつたからあつたらしい国をつくらうとする熱意がそのまま彼自身的情熱になることができたのである。日露戦争は日本の支配権力を政治的にも経済的にも強める結果になつた。しかし満州で死んだのは花袋の描いたような多くの「一兵卒」である。そのことが一方にあり、他方にもしツァーの軍隊がそのとき勝利を収めていたら、少くとも一時的に日本の植民地はさけられなかつたかもしれないという状況があつた。植民地化されないという保証は、戦争権力に反対する批判者があたえることのできないものであつた。明治の権力・陸軍・官僚一般の歴史的な役割、それがなし遂げたいくさの意味は、はるか後に日本軍国主義が企てた中国侵略の戦争の意味と同じものではない。それが同じでないというまさにその点において、権力と知識人の問題、その一面の要約としての鷗外の問題、さらにその出発点でもあり生涯の象徴でもあるドイツ滞在の問題が、複雑になるのである。

しかしヨーロッパはまた若い鷗外にとって、そういうことは一応はなれて、少くとも三つのことを意味したと思わ

れる。その第一は科学的精神である。その第二は近代文学の意味である。その第三は、感覚的世界の発見である。

鷗外がヨーロッパで何を学んだかを、「独逸日記」について調べるのは、おそらくあまり興味のあることではない。「妄想」のなかの回顧的な記述から想像するとすれば、それ以上に不確かなことである。「妄想」がどれほど自伝的であつても、小説の主人公は必ずその作者とはちがうだろう。

たとえば「日記」その他の資料によれば、在独中にどういう文学をよんだかを推定することができる。

架上の洋書は已に百七十余巻の多きに至る。鎖校以来、暫時閑暇なり。手に随ひて繙読す。其適言ふ可からず。盪胸決眦の文には希臘の大家ソフオクレエス、オイリビデエス、エスキュロス Sophokles, Euripides, Aeschylus の伝奇あり。穠麗豊蔚の文には仏蘭西の名匠オオネエ、アレキイ、グレキル Ohnet, Halévy, Greville の情史あり。ダンテ Dante の神曲 Comedia は幽昧にして恍惚、ギョオテ Goethe の全集は宏壮にして偉大なり。誰か来りて余が楽を分つ者ぞ。(一八八五年〔明治十八年〕七月十三日)

しかし一体これからどういふ結論をひきだすことができるだろうか。重要なのは、Goethe のなかに何をよみとつたかであつて、Goethe をよんだことではあるまい。いわんや当時の文芸思潮の先端にどこまで触れたかというようなことは、枝葉末節にすぎない。もし日本からヨーロッパへ出かけて、時代の文芸の先端からはじめたとすれば、それだけでも物事の理解の浅薄な証拠であつて、現にたとえばその後のシュールレアリズムの輸入などは、日本文学に加えるところが全くゼロに等しかった。鷗外が滞独中に文学について何を理解したかを知るためには、帰朝後の活動によつて判じざるほかはない。たとえば逍遙との有名な論争をはじめその文学論、また作品そのものとその文体である。

「独逸日記」にはドイツでの医学上の業績も出てくる。たとえばシュンヘンの Max von Pettenkofer の教室で行つた研究「ビールの利尿作用について」やベルリンの Robert Koch の教室での「下水中の病原菌について」などだ